

傀儡国家満洲国の「靖国神社」

——「新京建国忠霊廟」の建造プロセスおよび満洲国当局の祭祀活動——

曲 曉 范

一九〇五年、日露戦争後の日本は、ロシアとのポーツマス条約を利用して、元来帝政ロシアの勢力範囲であった中国東北地方南部の一部地区を占領し、関東州と南満洲鉄道の付属地を日本の植民地とした。日本の植民当局は、日露戦争の「勝利」を美化し、日本の植民統治を強固にするため、一九〇七年から次々と、占領した中国東北部の重点都市に、日本の戦没者の遺骨を埋葬した侵略性のモニュメントすなわち「忠霊塔」を立て始めた。そして同時に、日本からの大量の移民が中国東北部に移入するに伴い、日本の神道の重要な活動拠点たる神社もまた、次々と中国東北部の日本人居住都市に移植された。中国侵略の背景のもとで、日本の植民当局は入植者に対して侵略戦争の教育を行い、また神社を利用して侵略的な精神洗脳を展開した。すなわち建設した一部の神社では、日本の祖先神の天照大神や入植者の靈魂を祀る以外に、また日露戦争の際に中国東北部で死亡した日本軍人の「位牌」を祀って供養した。それゆえ、二〇世紀初頭における東北地域の日本人神社には、その建設の初めから濃厚な侵略的色彩が覆い隠されていたのである。

一九三二年の満洲国成立以降、日本の植民統治は東北全域に拡大していった。日本の侵略プロセスをさらに神格化し、植民統治を拡大させ、それによって中国の永久占領を現実化させるため、日本の植民当局は、一方で東北各地に「満洲事変」とその後の抗日武装勢力の討伐戦で死亡した日本軍人の遺骨を埋葬した「忠霊塔」を増やしていった。また一方では、「神社」よりもさらに強烈な日本植民奴隷化の特徴であった「建国忠霊廟」を東北各地に建設した。中でも最大規

模で、最も盛んに活動を行ったのが、一九四〇年に「満洲国国家」の名義で「国都新京」に建設された「建国忠霊廟」である。この施設は、外部の配置から内部の祭祀形式まで、完全に東京の「靖国神社」を模して作られていた。そして、満洲国によって「国家護持（管理）」され、専ら「建国の神聖な事業に身を捧げた日本と満洲の文武官員の位牌」が祀られ、「招魂」活動を通じてその「神格化」がなされたのであった。それゆえ、そこは表面だけを宗教に似せた「超宗教」的な「国家レベル」の植民地主義による政治活動の場所なのであり、事実上、満洲国の「靖国神社」であったといえよう。こうした宗教活動の衣を着て、日本の侵略的な植民地主義による統治を掲げてそれを発揚させた施設に関しては、この半世紀、中国国内ではほとんど専門的な研究は行われていなかった。¹そのため、筆者は実地考察を基礎として、その建造のプロセスと当時の日本の当局がそこで行った活動について論述を加え、東北占領史の研究を進めていく。そして合わせて、吉林省、長春市がこの建築文化財を一層保護していくため、必要な参考資料を提供していく。

一、「新京」の「建国忠霊廟」の建造プロセス

満洲国の「国都新京」に「建国忠霊廟」を建造し、これを「建国の神聖な事業に身を捧げた日本と満洲の文武官員の招魂社」とする最も早い計画は、一九三五年に「満洲国国務院」によって提出された。同年七月、「満洲国国務院」は軍政部を指定して「満洲国招魂社建設準備委員会」を組織し、軍政部の最高顧問であった佐々木が委員長に就任した。それ以後の二か月間のうちに、委員会は建造趣旨、建造地点、建造規模、建築様式と方位、名称、建造費用、設計施工、竣工後の祭祀活動など、一連の問題をめぐって前後五回にわたって会議を開き、最終的に一月初めに建造の草案を決定した。³草案では、「招魂社」を「新京」南郊の黄龍公園（現在の南湖公園）の東側にある歓喜嶺の「聖域」内に建造することが確定した。⁴一九三六年一月一日、満洲国国務院によって正式に「満洲国招魂社建設準備委員会草案」が承認され、同日、委員会は解散し、直ちに「護国廟建設委員会」が作られた。そして計画プロジェクトの設計とプロジェクトの前

期部分が準備され、建造される施設を「護国忠霊廟」の名称にすることが定められた。

「護国廟建設委員会」は「國務院宮繕需用品局」が主体となり、局長の笠原が委員長に就任し、(故)内藤が幹事長に、相賀科長が幹事となり、相賀自身が設計と監督の両職を兼務した。一九三六年一月から三年間を経て、「建造方針、祭祀趣旨」に従って、建築様式、祭祀方式などについて詳細な計画と設計が行われた。建築設計の責任者は、当時「南満洲工業専科学校」の校長であった岡大路(後に国都建設局長に就任)と同校の科長であった村田治郎、そして設計の担当職員は、国都建設局の矢追又三郎、加藤完、奥本一市、田中貞一、黒木春時、加川藤人、植原隆一などであった。一九三六年三月二六日と四月二一日の両日の委員会において、まず建築全体の様式(莊重宏大、淡雅、懐旧)、壁はコンクリートの構造とすること、壁面にはセメントを塗った後に日本の宮殿で常用される特製漆を塗ること、屋根及び壁の外観に中国宮殿風の色彩を使用すること、中国様式の彫刻文様と屋根の曲線によって高大で莊嚴さを表現すること、建築材料はできるだけ「満洲での原地調達」に努める等の議論がなされ決定された。しかし当時、東北部では適当な土で焼かれた琉璃瓦が見つからなかったため、後に実際に採用された瓦は、日本の瀬戸で焼かれた深青色の煉瓦であった。本殿、拜殿、脇殿における神門の色彩の明るさを保つため、塗る顔料もドイツ製の酸化コバルトが用いられた。軒や屋根に深青色が用いられた外、扉や外壁は元来の設計では石造の面影を極力残すものであったが、後に局長の笠原の建議によって多くの色彩図が製作され、綺麗な色彩が施されたカラフルな壁になった。また内部の天井板の色彩にも、色彩図を用いる方法が用いられた。初めの計画では、壁には全て金箔を貼る予定であったが、拜殿を裝飾する段になって、満洲国当局には黄金が不足していたため、金箔を貼る箇所は、黄の漆で代用したのであった。

殿内に配置する専用の彫刻や金属器具もまた、特別に製作された。すなわち、まず実物大の模型を作ってから、模型を用いて金銅製品の実物が製作された(第二期プロジェクトでは、拜殿以外の裝飾物はいずれも電気鑄造品に換えられてしまった)。その中で、模型の製作を担当したのは今村三郎、裝飾を担当した職人は筒井新作、武田十子男、好地武などの人々

であった。それと同時に、相賀や藤島らの主管のもとで、「護国廟」建設後の毎年の大まかな「例祭草案」が制定された。草案には、礼拝の対象（上方が丸く、下方が四角の神像位牌）、祝詞の形式、演奏される満文の楽章、清朝様式の楽器のデザインなどが含まれていた⁶。しかし、祭神、祭祀の方法については定説がなく、いったい齋戒祭祀法を採用するのか、それとも神道の祭祀法か、仏式か、純神道式か、さらには祭祀を行う人の服装をどのようにするのか、なお検討中であった。

建造プロジェクトは二期に別れ、第一期プロジェクトは、本殿と廟務所の建設を行っただけであった。一九三六年四月一九日、「護国廟建設委員会」の各委員、「國務総理大臣」鄭孝胥以下の各大臣、関東軍参謀長の東条英機、そしてその他の関東軍と満洲国の幹部らが「護国廟」の建設予定地において「地鎮祭」を挙行し、これが「護国廟」建造プロジェクトの幕開けとなった。同年五月四日、國務総理の張景惠が「鍬入れ式」を行い、プロジェクトの着工が正式に宣言された⁷。しかし、その後まもなく、國務院総務庁長の命によって、同年八月二〇日、「護国廟」は「建国忠霊廟」に改められ、廟の正面が向く方角も初めに決められた大同大街に沿った北から、日本の伊勢神宮と東京を背にする西北の方角に改められた。そうした考えに基づき、「建造委員会」は「新京安達部測量班」に委託して、新たに「忠霊殿本殿」が伊勢神宮を背にする方角を向くための角度を測定した。それによって伊勢神宮までの一、四三〇キロメートルの方位角一三二度四八分五四秒を本殿の中心位置と定め、新たに土地の確保が計画され、総面積も急激に拡大して四六万平方メートルにまで達した。第一期プロジェクトは、廟区の地ならしと道路建設をもって終了した。プロジェクトの第二期は、一九三八年一〇月下旬に挙行された棟上げ式をスタートとし、建設する主要なものとして、拝殿、東西脇殿、角楼、神門、洗面所などが決められた。受注は第一期と同様、三田芳之助組が請け負い、プロジェクトの現場監督責任者は「建國廟建設委員会」の山本、田中、谷野、尾十、加藤らの人たちであった。この時期、日本は中国各地における侵略戦争の規模を益々拡大していたため、経済物資が不足し、さらに満洲地区の建築資材の価格や労働者の人件費が高騰し、二

期プロジェクトの経費も極めて逼迫していた。そうした経費と労働力の不足を補うため、満洲国当局は青少年学生に働きかけて「勤労俸仕隊」を組織させ、「建国忠霊廟」の工事現場で義務労働を推し進めていった。プロジェクトが最終的に完了するまで、満洲国当局が組織した延べ一四万人の「勤労俸仕隊」は、この植民統治プロジェクトのために勤労奉仕を行ったのであった。それゆえ、そうした奉仕活動は、全ての建設プロジェクトの過程において、満洲国当局が実施した青少年に対する植民統治教育の道具となっていたと言えよう。

一九四〇年八月二二日、巨額の資産（総投資額一六〇万満洲貨幣）を費やし、多数の労働力（二七万人）を投入した、この植民統治を美化するプロジェクトが、四年半の工期を終えてついに完了した。

この建築群の大まかな状況は、次の通りである。第一建築の前門は「建国広場」に位置し、大同大街と四五度の角度となり、四柱三間の牌楼式建築で、高さ一三メートル。前門を入ると、長さ七〇メートルの参道となっており、途中二カ所で参道の方向が変わる。すなわち、まず真っ直ぐ進むと途中で大同大街と平行する南北方向に折れ、続いて西南方向に向きが変わり、内庭へと入っていく。参道に沿って南に三〇メートル行くと、二階建ての廟務接待所（面積六四四平方メートル）がある。さらに一五〇メートル前進すると、幅一七メートル、長さ三〇メートルの昭忠橋があり、昭忠橋を渡ると中国の伝統様式を採用した内庭の中門に到る。この門の上部は深青色の琉璃瓦で屋根を飾り、下部は三間のアーチ型の門となっており、面積一七五平方メートル、高さ一四・八メートルで、この門が内庭を内院と外院とに分けている。内院が全ての建築群の中核をなしており、さらに前院と後院とに分かれる。前院の建築物には、内門（または神門と称し、高さ一三・八メートル、一九五平方メートル）、拝殿（または祭殿と称し、廟内の中心的建築。大院の中軸線に向かって正面に位置し、霊魂を祀る儀式の重要な場所であり、多くの死者の位牌が殿内に安置されている。内部のしつらは豪華で、祭壇が殿内正面に設けられ、周囲には円柱が天井までそびえ立ち、壁と天井には華やかな壁画が描かれている。七間で、幅三八メートル、高さ一九・七メートル、面積九〇五平方メートル）、左右協殿（各高さ一四・五メートル、五二三平方メートル）、四周の回廊が含まれる。後

院は霊殿（塔式建築で、表面に大理石を貼る。高さ一九メートル、各辺の長さ七メートル、面積四九平方メートル）を中心として、四周は高さ六メートルの回廊と角楼（各角楼の高さ二メートル、面積二五平方メートル）が配されている。このように、全体の構成は整然としており、広大な規模を誇っていた。

二、「建国忠霊廟」における満洲国当局の各種の祭祀活動

まだ「建国忠霊廟」が完成する一年前、満洲国当局は、毎年この廟で挙行する二つの大規模な祭祀活動と四つの中規模の祭祀活動を決定した。大規模祭祀とは、五月三十一日の「春例祭」と九月十九日の「満洲事变紀年日祭」（後に「秋例祭」と呼ばれる）、そして中規模の祭祀とは三月一日の「建国日祭」、「祈穀祭」（毎年の穀雨の日）、「遠神祭」（七月十五日）、「新嘗祭」（一〇月一七日）であり、一律に「恒祭」（すなわち例祭）として執り行われた。統計によると、この廟では一九四〇年九月一七日の開廟から一九四五年八月一五日の日本投降と満洲国政府の崩壊までの四年間に、満洲国当局は合計一〇回の大規模祭祀と、二〇回近くの中規模祭祀を行った。その他、毎年さらに数回の小祭も行われた。小祭では、「歳旦祭」（一月一日）、「月例祭」（毎月一八日）、「歳暮祭」（二月三十一日）などの名目によってたびたび祭祀が行われ、恒祭にのって執り行われた。¹⁰

一九四〇年の「満洲事变記念日祭」が開廟祭となったため、祭祀の規模は最大となり、儀式は五日間にわたって行われた。九月一七日の初日は「神殿浄祓之儀」と「御霊代奉安儀式」が執り行われ、午前九時、先ず「神殿浄祓」儀式が始まった。「この儀式は建国三国神（死去した満洲国務総理の鄭孝胥、関東軍司令の武藤信義、満洲国軍中将の朱家訓）を迎え、この地を鎮守していただき」、「儀式は先ず盥漱浄之儀を行い、次に廟の内院、外院から院外の神域（全ての廟区）四門に到るまで、祭祀官によって浄米がまかれた」のであった。¹¹この儀式が終わると、引き続き満洲国皇帝の薄儀が、本祭祀を主管する祭祀府の官員を「帝宮」に召し、「御霊代」（死者の靈魂の依り代——祭祀に用いる象徴的な器物）を親授し

た。午前一〇時三〇分、祭祀を主管する官員の橋本祭祀府総裁以下、祭官一同は、「御霊代」を「忠霊廟」本殿内に安置し、「御霊代奉安」の儀式を執り行った。¹²

九月一八日から四日間、鎮座祭(多くの神々を迎接し、その地を鎮守してもらうための儀式)が行われた。鎮座祭の初日の九月一八日は、午後八時三〇分から主要な行事が始まり、夜のとばりのもとで祭殿の内外に「神庭灯」が一斉に点灯された。九時、殉難者の遺族代表二〇〇名の他、「国務総理大臣」の張景恵をトップとする満洲国軍隊、警察、政府の官員三〇〇余名が加わって本殿に入り、鄭孝胥、朱家訓中將以下の満洲国の「殉国英霊」四、二六四柱、関東軍の武藤信義以下の「殉国英霊」一九、八七七柱に対面し、祈禱が行われた。続いて、主祭官によって日本文と中国文(この時は満文と呼ばれた)の祭詞が読み上げられ、楽隊によって祭樂が演奏された。

一九日は、「皇帝親拝」儀式が行われた。午前一一時、「皇帝」溥儀が豪華な錦の衣装を身につけ祭殿の正面に進み、「殉国の神霊」に「拝礼し祈禱した」。そして「新京」の「全市民が一斉に黙禱を捧げ、省市の各官公庁は恭しく遙拝式を行った」¹³。

二〇日は、「謝神」儀式が行われたが、これは四、〇〇〇万の「満洲国民慰問神霊」に感謝する儀式であった。儀式は主として、楽隊によって「振鐸」、「万歳楽」、「陵王」、「長慶子」などの楽曲が「神」の前で演奏され、そして引き続き「民衆の自由参拝」の時間となった。こうして三日間の鎮座儀式が終了した。

満洲国がここで行ったもう一つの「大祭」は、一九四一年九月一七日から一九日にかけての第一回「秋大祭」であった。これより以前、満洲国当局は忠霊廟祭祀に関して、次のことを提出していた。「満洲の国事に忠誠だった者は、建国前、建国後にかかわらず、「国家」を守るために死んだ者であり、等しく序列し、末永く廟に祀り、香を絶やしてはならない。それゆえ一方で靈魂を祀り、また一方で顕彰すべきである」。こうしたことから満洲国の祭祀府は、この「秋大祭」の前に、正式に日露戦争から満洲事変期間に中国東北部で戦死した日本軍人の靈魂を「建国忠霊廟」に納めて祀った。

それと同時に、一九三八年の吉林琿春の張鼓峰事件と一九三九年の内蒙古ホロンボイルのノモンハン事件において、多くの日本軍人が戦死したが、一九四一年秋、満洲国当局は上述の三カ所の日本軍戦没者リスト四、九二七人を収集し、「建国忠霊廟に納めて合祀する」ことを決定した。それゆえ一九四一年の「建国忠霊廟秋大祭」の最初の行事は、九月一六日から一八日にかけての「第一次合祀祭」であった。出席者が最も多かった日は一七日で、溥儀以下の満洲国の官僚数千人、日本軍人と満洲国軍人二、五〇〇人、及び各界の代表合わせて一万人が祭祀に参加した。一九日は例祭であった。

日本の関東軍の度重なる対外戦線の失敗と、満洲国「国軍」が抗日勢力の襲撃を受け続けたことに伴い、一九四二年以降、「建国忠霊廟」に祀られる軍人の数も急激に増加した。一九四二年の「春例祭」では「霊魂柱」の総数は二八、九一七柱であったが、¹⁴「秋祭」時には「合祀祭祀」された「霊魂柱」の総数が三二、二四一柱となった。¹⁵そして一九四四年の「春例祭」時の「霊魂柱」では三六、八八〇柱に増加し、¹⁶さらに一九四四年九月の「秋祭」前に「合祀祭祀」された霊魂柱の総数は四万を突破し、四〇、八五〇柱にまで達した。¹⁷このように、「入祀」して祀られる霊魂柱が増え続けていたにもかかわらず、日本軍と満洲国軍の作戦が失敗し続け、満洲国の経済状況が悪化したことから、満洲国当局には大規模な「祭拜」活動を行う力は全くなく、そのため祭拜活動の規模はしだいに縮小していった。一九四五年の「春祭」時には、参加者の人数はすでに極めて少数であり、完全に体裁を飾る活動にならざるを得なかったのである。

満洲国当局は、毎年三回の「例祭」時にここで大規模な「祭祀」を行った以外にも、青少年の「忠君愛国」意識を養うため、各学校の青年学生に毎日必ず「国都新京」の方角を向いて拝礼するよう強要した。一拝は「皇帝陛下」に、二拝は「建国神廟（日本の天照大神を祀る）」に、三拝は「建国忠霊廟」に対してであり、その中の「満洲国建設のために犠牲になった日本兵士」と非業の死を遂げた「満洲国官兵、官員」を遙拝するのであった。¹⁸そして、続いて東を向いて「天皇陛下を遙拝」し、もし遙拝を拒否したならば処罰された。こうしたことから「建国忠霊廟」は、満洲国の時期におい

て単に植民統治を遂行する超宗教的な事柄を担うだけではなく、日本と満洲国当局が青少年に対して行った軍国主義とファシズム教育のための重要な拠点でもあったと見なすことができよう。

三、「建国忠霊廟」と併存した「忠霊塔」「建国神廟」との関係

前述したように、一九〇五年から日本は、中国の東北部に「関東州」を建設して植民地支配を開始し、占領地にいわゆる「忠霊塔」を立て、塔内に非業の死を遂げた日本軍人の位牌を祀った(例えば「新京(長春)」の忠霊塔は、関東軍司令の武藤以下二、〇〇八名の牌位)。そして、毎年春秋の二季と日本の祝日、及び日本軍の「占領記念日」に、植民当局と日本軍はいずれも塔前で祭祀を挙行して「瞻仰(仰ぎ見る)」した。こうした形式と活動内容から見ると、「建国忠霊廟」とほぼ同じであるが、しかし明瞭な違いもある。すなわち、「忠霊塔」は「日本軍の功績を顕彰する」ことを目的としており、内部に祀られた位牌は全て日本の軍人のものであった。一方、「建国忠霊廟」は「満洲国国廟」であり、そのため「日満一家」や「日満の協和精神」をはっきりと表す必要上、内部に祀られた人々はいずれも「建国で犠牲になった日本と満洲国の文武官員、軍人」であった。さらに「忠霊塔」には、死亡した軍人の「霊魂の牌位」を祀った他、建設の定礎時に、多くの死亡者の骨灰が量の多少を問わず埋葬されたのである。それに対して「建国忠霊廟」で祀られたものは、全て「霊魂柱」であった。

その他、「建国忠霊廟」竣工前の一九四〇年五月、すでに満洲国政府は、日本の神社の構造を模した「建国神廟」と称する施設を、満洲国皇宮の院内に建設していた。この「神廟」は、当時満洲国の「国廟」と定義されていたが、ではこれと「建国忠霊廟」とは、如何なる関係にあったのであろうか。

実際、満洲国当局が「国都新京」に「建国神廟」の建造を計画したのは、「建国忠霊廟」の建設計画以前の一九三五年一月に始まる。この月、満洲国政府は「満洲国と日本国、満洲人と満洲の日本人との一体化を促進する」ことを趣旨と

した「国家神社」の建設を提案し、國務院総務庁企画課を中心として、満洲国政府建築局と共同で「国家神廟」準備委員会を発足させるよう指示した。二月初め、準備委員会は日本の内務省神社局や関係各省庁、その他の関係者に委託し、試案の作成を行い、その後「神社局」によって設計図が製作された。二月二十七日、満洲国國務院は総理官邸において東京の計画を審議し、建築の構造、祭祀方式、経費予算などの設計プランを決定した。続いて三月九日、満洲国皇宮の庭園東南角において、建設着工の儀式が執り行われた。建物は総檜による平屋作り（屋根にのみ銅板が使用された）で、総面積一三五平方メートル、主殿一三・〇平方メートル、祝詞殿一九・八平方メートル、祭祀庫三・八平方メートル、神儀所三・八平方メートル、拜殿八五・二平方メートルであった。五月二十八日、「建国神廟」は予定の工期どおりに竣工した。日本の関東軍と満洲国政府は、このプロジェクトの立ち上げ、及び工事の開始を非常に重視し、「皇帝」溥儀と関東軍司令の梅津が共に自ら棟上げ式に出席した。¹⁹ 同年七月、溥儀は「慶祝日本紀元二六〇〇年」を口実に、二度目の訪日を行った。訪日期间、溥儀は日本民族の最高神すなわち祖神「天照大神」を祀る伊勢神宮を参拝し、天照大神の象徴である三位一体の神物（剣、神鏡、勾玉）を「満洲国を加護する建国の元神」として、満洲国に持ち帰った。溥儀の帰国後、七月一五日に『国本奠定詔書』が發布され、工事が完了した「国家神廟」を「建国神廟」と定め、「建国の神」として天照大神を長く祀ることが正式に宣言されたのである。そして夜中の一時、溥儀と関東軍司令の梅津が、「建国神廟」の祭祀台において、天照大神を迎拝する「鎮座儀式」を執り行った。この儀式が事実上の「建国神廟」の開廟式であり、これより「建国神廟」は、「満洲国民」が必ず遙拝しなければならない「国家最高級」の、「日満協和」というファシズム的な政治精神を宣伝する建造物となったのであった。

満洲国当局の解釈に依れば、この廟は「国家の元神（建国神）」を祀っているので、最高ランクに属する「満洲国の本廟」であった。そして、この廟は護衛神によって守らなければならず、その護衛神がすなわち満洲国「全体の殉国の忠烈」というわけであった。そのため満洲国は「建国忠霊廟」の建設を決定し、「殉国の忠烈」を祀り、殉国者を神格化するこ

とによって「元神」を護衛する神としたのである。このように、「建国神」と「護衛神」は共に「国神」であったにもかかわらず、互いに父子や君臣の関係にあったと言えよう。²¹ こうした位置づけによって、「建国忠霊廟」は、「建国神廟」の子廟となったのであった。²²

四、「新京建国忠霊廟」の現状およびその保存と使用に関する建議

一九四五年八月一日、日本が降伏し、満洲国政府が崩壊したことによって、この「建国忠霊廟」の建築群は過去の歴史の遺跡となった。一九四六年から一九四八年にかけての国民党と共産党との内戦期間中、長春の市街では多くの激戦があり、幾度も政権が交代したが、しかし国民党と共産党の双方とも、この建築群の保存に対しては非常に配慮したのである。

一九四八年末、国民党と共産党による東北部の内戦が終わり、中国共産党が指導する長春市政府が成立した。その後、この一帯は軍事学校の支配区に割り当てられ、主要建築は解放軍の空軍第一予科総隊、すなわち元の空軍長春飛行学院現在の空軍航空大学に編入された。まさにそうした原因によって、この「建国忠霊廟」という文化財は特別な保護を受けることとなり、「大躍進」や「文化大革命」などの度重なる政治運動の衝撃から逃れて、八〇年代に到るまでずっと非常に良好な状態で保存されてきた。

一九八〇年代、中国の文化財保存は法制化の時代に入った。長春市と吉林省の文化財担当の部署は、この建築を吉林省重点文物保護単位に認定し、一層の保存のための、必要な法律的な保障と政策的な拠り所を与えた。しかし、この文化財に対する市民の認識には差があった。ある人たちは、この建物は日本が中国を侵略し、東北部の人々を奴隷のように酷使したシンボルであり、屈辱を思い起こさせる物と見なした。そのため韓国人を見習って、同じように日本の植民地時代の文物は取り壊すべきだとの認識であった。一方、またある人たちは、これらの建築は半世紀以上も存在し、文

革を経て今日まで残ったことは非常に希有なことであり、何があっても絶対に文化財と見なすべきであると考えた。そして、これらの建築は日本の侵略プロセスを全て記録しており、愛国主義教育を行う上での実証的建築物なのであって、当然保存すべきであると主張した。こうした考え方の不一致によって、九〇年代以来、関係部署が何度も修理や博物館にする計画を提案しても、さまざまな抵抗や妨害に遭って実現することはなかったのである。当然、この施設は、今日に至るまで適切な保存や利用が行われることはなく、この文化財を管理する部署も自分たちの利益から出発し、一般公開に向けて働きかけることには消極的である。このように、適切な保存が行われてこなかったため、建物の多くの部分で破損が生じ、倒壊の危険のある箇所も見られるようになってきている。もし短期間の内に保存問題を解決できなければ、数年先には建物の破損は一層深刻になるであろう。

この建物に対する筆者の見方は、以下の通りである。この建築群は日本の植民地時代における東北地区最大の「靖国神社」として建設されたのである。そのため、その存在は我々にとって日本の植民統治を直接理解し、観察し、研究できる実物であり、政治的意義を有する建物なのである。しかも、それは長春の都市としての性質と機能が転換したことを示す証人なのであり、近代における長春の変遷を物語る歴史断片を記録し内包していることから、都市史と建築史研究にとっても重要な価値を有している。そのため、適切な保護を加え、永久に保存すべきであることは当然であろう。また筆者は、次のような考えを持っている。もしこの文化財を保存しようと考えれば、まず直ちに各方面の専門家を組織して詳細な調査を実施し、早々に修理と保存の計画を定め、「もとのままに修復する」の原則に基づき、完全に復元すべきである。そして、この建物を「東北占領史博物館」として一般に公開する。公開する場合、先ず一つめとして青少年は無料とする。二つめとして観光客に公開し、ここを観光のための有料見学場所に変え、入場料を文化財の日常維持費の一部に転化させる。三つめとして修理を前提に、この建物を、満洲国皇宮、日本関東軍司令部、及び司令官官邸などといった、長春における満洲国時期のシンボリックな建築物と一括して、共同で中国の「全国重点文物保护单位」

に申請する。こうした方法によって、文化財の保存にとつてさらに良好な社会環境を作り出すのである。
 (本論文の執筆においては、東北師範大学国際交流処の安載鶴副処長より暖かなご支援を賜った。また東北師範大学日本研究所の陳秀武副教授には日本語資料の翻訳の協力を賜った。ここに心から謝意を申し上げる。)

註

- 1 筆者が目にした満洲国の「新京建国忠霊廟」に関する国内の研究としては、李之吉「建国忠霊廟」(李之吉『長春近代建築』長春出版社、二〇〇一年、第一五七―一六三頁)、長春晩報の記者である李冬晨と宗芳が王斌氏(満洲史研究家)等へのインタビューを基にして記した「掲開「忠霊廟」的真面目」(『長春晩報』二〇〇五年二月二二日)等がある。
- 2 この建築物は、現在の長春南湖附近の空軍長春航空大学校区内にある。
- 3 矢追又三郎「建国神廟、建国忠霊廟」(『満洲建築雑誌』第二三卷一期、第七頁)。
- 4 この地を「建国忠霊廟」を建造するための敷地としたことには、以下の理由があった。一九三一年九月一八日に満洲事変が勃発すると、日本軍は翌早朝、長春に侵攻したが、長春の南嶺大宮に進行中、中国軍の激しい抵抗に遭い、四三名の日本兵が戦死した。中でも、この場所での戦死者が多かったことにより、一九三二年以後、日本の関東軍と満洲国当局はこゝを「記念地」として、「聖域(いわゆる「聖戦之地」)と呼ぶようになった。当局の言葉を借りれば、この場所は「建国忠霊廟を建てる上で最も適した聖地」であり、「満洲国の建国のために身を捧げた英霊を祀る」根本の地とすることができるのであった。
- 5 矢追又三郎「建国神廟、建国忠霊廟」(『満洲建築雑誌』第二三卷一期、第七頁)。
- 6 矢追又三郎「建国神廟、建国忠霊廟」(『満洲建築雑誌』第二三卷一期、第八頁)。
- 7 『盛京時報』一九三九年五月五日、第三面。
- 8 伊勢皇大神宮は内宮とも称し、三重県伊勢市の五十鈴川沿いに位置する。ここは日本神道の聖地として二〇〇〇年前に建てられ、天照大神を祀っている。天照大神は皇室の祖神であり、また日本民族の最高神であり、八百萬の諸神の象徴である。伝承によると、初代神武天皇から第十代崇神天皇の時代は、天照大神は古都大和(現在の奈良県)の皇宮内に祀られていたが、第十代崇神天皇の時に日本国内で疫病が流行したため、崇神天皇は皇女豊鍬入姫に命じ、皇宮外の奈良盆地東部に天照大神を祀らせた。そし

て第十一代垂仁天皇は、皇女倭姫に命じて、天照大神を祀る最適な場所を探させることにした。倭姫は大和を出発、近江、美濃を経て伊勢にたどり着き、その地に天照大神を祀る場所を得たと言われている。

9 李之吉『長春近代建築』（長春出版社、二〇〇一年版、第一五七―一五九頁）から引用。

10 「長春晩報記者李冬晨采訪偽滿史研究專家楊忠臣談話摘要」（李冬晨、宗芳「掲開「忠靈廟」の真面目」所載、『長春晩報』二〇〇五年二月二二日）参照。

11 「建国忠靈廟敵爾舉行修祓礼」（『盛京時報』一九四〇年九月一八日）。

12 同前注。

13 「建国忠靈廟鎮座祭」（『盛京時報』一九四〇年九月二〇日）。

14 「建国廟春恒祭」（『盛京時報』一九四二年六月一日）。

15 「建国忠靈廟秋季祭」（『盛京時報』一九四二年九月一九日）。

16 「建国忠靈廟春大祭盛況」（『盛京時報』一九四四年六月一日）。

17 『康徳新聞（盛京時報）』一九四四年九月二一日。

18 <http://news.hsrn.com/> 桂維林「偽滿時期日本在遼寧鉄嶺推行奴化教育的回顧」。

19 矢追又三郎「建国神廟、建国忠靈廟」（『満洲建築雑誌』第二三卷一期、第五頁）。

20 矢追又三郎「建国神廟、建国忠靈廟」（『満洲建築雑誌』第二三卷二期、第六頁）。

21 矢追又三郎「建国神廟、建国忠靈廟」（『満洲建築雑誌』第二三卷一期、第七頁）。

22 矢追又三郎「建国神廟、建国忠靈廟」（『満洲建築雑誌』第二三卷一期、第七頁）。

この外、「建国神廟」は祭祀の内容や形式において、当時、東北各地に遍く存在した「日本神社」と基本的に同じではあるが、形式、性質、等級において顕著な違いがある。

日本人によって建てられた「神社」が祀る「天照大神」は日本神道の範疇に属するが、「建国神廟」が祀る「天照大神」は「満洲国の元神」に転化させられたものである。また同時に、日本神社は純粋に日本人が所有し、民間的な性質を帯び、日本人のみに運営権があり、直接、日本植民統治機関東局に所属した。一方、「建国神廟」は満洲国政府に属する「国家神廟」であった。前掲の矢追又三郎「建国神廟、建国忠靈廟」（『満洲建築雑誌』第二三卷一期）を参照。